

あとがき

筆者が初期および後期研修を受けてからもう20年以上が経ちます。研修を受けていた当時と比較し、現在の入院患者診療は、ますます複雑化しているように感じています。入院患者管理において、入院の原因となった主疾患のマネジメントが重要であることはいうまでもありませんが、主疾患以外の症候・疾患への対処（予期しない発熱など）、栄養、リハビリへの配慮、疼痛管理、また狭義の診断・治療の枠にとどまらないさまざまな問題（転院の要否の判断や、その調整など）、など主治医として対処しなければならない問題は幅広く、こうした幅広い問題の解決にあたっては他部門・他職種との連携・院外の多彩なリソースとの連携や、病院内外を見据える視野の広さ、新たな協働のありかたなどが求められているかと思います。

本企画の第1弾にあたる、レジデントノート増刊「入院患者管理パーカクト」（2014年6月発行）ではそのような問題点をテーマとして特集を組み、幸い好評を得ましたが、今回はPart2としてその特集で伝えきれなかった点を中心にさらに新たなテーマを組み入れました。執筆者としては、共同で編者を担当していただいた森川暢先生を通じ、総合診療領域を中心とした若手の先生方にお願いしました。お願いしたテーマはいずれも一筋縄ではいかない難しいものであったかと思いますが、日々こうした臨床の場での複雑な課題に苦闘しながらも、経験にとどまることなく、可能な限りエビデンスに基づいた診療を行っている医師ならではの実践的な内容となっているのではと思います。

本書が2014年の第1弾とあわせて、入院患者に生じる多様な問題に悩みながら対処している初期研修医や若手医師、チームにとって少しでも助けになるものになることを願っております。

2017年10月

天理よろづ相談所病院 総合診療教育部
石丸裕康